



2001年12月15日 (土) [公開セッション]

13:00	<p>開会挨拶</p> <p>主催者挨拶 環境大臣 川口 順子 後援者挨拶 茨城県知事 橋本 昌 来賓挨拶 衆議院議員 馳 浩 参議院議員 加藤 修一</p>
13:30	<p>特別講演</p> <p>POPs－残留性有機汚染物質 ボー ヤンセン (スウェーデン スtockホルム大学)</p>
14:15	<p>休 憩</p>
14:30	<p>第1部 我が国の取組の現状</p> <p>環境省における内分泌攪乱化学物質問題への対応について 安達 一彦 (環境省)</p> <p>内分泌攪乱化学物質問題に関する我が国の取組の現状 —環境省全国一斉調査の結果— 田辺 信介 (愛媛大学 沿岸環境科学研究センター)</p> <p>内分泌攪乱化学物質の日本におけるヒト胎児複合曝露の現状 森 千里 (千葉大学大学院医学研究院)</p> <p>魚類への有害性評価のための試験体系 横田 弘文 (財団法人化学物質評価研究機構)</p> <p>内分泌攪乱作用が疑われる物質の低用量における影響評価の試み 青山 博昭 (財団法人残留農薬研究所)</p> <p>DNAマイクロアレイ技術を用いた内分泌攪乱化学物質の影響評価の試験法開発 近藤 昭宏 (宝酒造株式会社 バイオ研究所)</p> <p>水環境における内分泌攪乱化学物質に関する日英共同研究について 有菌 幸司 (熊本県立大学)</p> <p>国立環境研究所における内分泌攪乱化学物質研究 森田 昌敏 (独立行政法人国立環境研究所)</p>
16:00	<p>休 憩</p>
16:15- 18:15	<p>第2部 パネルディスカッション</p> <p>『環境ホルモン21世紀・開かれたアプローチをめざして』</p> <p>フォトジャーナリストが見たベトナム戦争における枯葉剤の影響 大石 芳野 (フォトジャーナリスト)</p> <p>生物システムと化学物質 養老 孟司 (北里大学)</p> <p>環境とドーピング 河野 一郎 (筑波大学)</p> <p>環境ホルモンと非線形科学 合原 一幸 (東京大学大学院 新領域創成科学研究所)</p>

2001年12月15日 (土)

ディスカッション

座 長： 谷田部雅嗣 (NHK 解説委員)
 パネリスト： 合原 一幸 (東京大学大学院 新領域創成科学研究所)
 岩尾總一郎 (環境省)
 大石 芳野 (フォトジャーナリスト)
 河野 一郎 (筑波大学)
 森 千里 (千葉大学大学院医学研究院)
 養老 孟司 (北里大学)
 ジョン ピーターソン マイヤーズ (米国 W. アルトン ジョーンズ財団)

2001年12月16日 (日)

9:30

セッション1 脳神経系機能発達への影響と作用メカニズム

座 長：黒田洋一郎 (東京都神経科学総合研究所)

ダイオキシンおよび他の環境由来の化学物質の毒性の標的としての脳の発達と行動
 バーナード ワイス (米国 ロチェスター大学)

指定コメント:

遠山 千春 (独立行政法人国立環境研究所)

甲状腺ホルモン、脳の発達、および環境

R. トーマス ゴラー (米国 マサチューセッツ大学)

指定コメント:

鯉淵 典之 (群馬大学)

培養下での神経細胞ネットワークの機能発達

～内分泌攪乱化学物質の脳発達への影響を調べるイン・ビトロでのアッセイ系～

黒田洋一郎 (東京都神経科学総合研究所)

内分泌攪乱化学物質の高等動物における影響評価

吉川 泰弘 (東京大学大学院)

学習障害および行動障害における環境由来の神経毒性物質の役割を示す証拠

デボラ C. ライス (米国 環境保護庁 (EPA))

12:00

昼 食

13:30

セッション2 スクリーニング・試験法

座 長：ハーマン B.W.M. クーター (OECD)

内分泌攪乱化学物質の試験と評価に関するグローバルストラテジーに向けた国際的イニシアチブ
 ハーマン B.W.M. クーター (OECD)

エストロゲン様化学物質のスクリーニングと試験の枠組みの国際的標準化

ジェームズ W. オーウェンズ (米国 プロクターアンドギャンブル社)

水生環境における内分泌攪乱現象の試験戦略

ダニエル B. ピックフォード (英国 アストラゼネカ社)

鳥類におけるスクリーニング法の開発の現状と今後の展望

和田 勝 (東京医科歯科大学)

日本における両生類の内分泌攪乱試験研究の現状

内山 実 (富山大学)



2001年12月16日 (日)

15:35	休 憩
15:55	<p>セッション 3 HTPS/QSAR(ハイ・スループット・スクリーニング/構造活性相関) 座 長：菅野 純 (国立医薬品食品衛生研究所) ロバート J. カブロック (米国 環境保護庁 (EPA))</p> <p>HTPS/QSAR (ハイ・スループット・スクリーニング/構造活性相関) 内分泌かく乱化学物質問題におけるスクリーニング手法と先端科学・技術 菅野 純 (国立医薬品食品衛生研究所)</p> <p>QSARを用いた内分泌攪乱化学物質の優先順位付け ウェイダ トン (米国 FDA 国立毒性学研究センター(NCTR))</p> <p>標的受容体構造に基づく内分泌攪乱物質の三次元構造活性相関解析 富岡 伸夫、板井 昭子 (株式会社医薬分子設計研究所)</p> <p>Reporter Gene Assayを利用したHigh Throughput Pre-screening法の有用性 武吉 正博 (財団法人化学物質評価研究機構)</p> <p>機能的ゲノミクスに向けた新たなアプローチ ブルース ブルンバーグ (米国 カリフォルニア大学)</p> <p>エストロゲン受容体に相互作用するペプチドのコンビナトリアル・ファージ・ライブラリ・スクリーニング：外来性エストロゲン類の生物学・薬理学研究のためのツール ジュリアン M. ホール (米国 国立環境衛生科学研究所)</p>
18:00	休 憩
19:30- 21:45	<p>ナイトセッション トキシコジェノミクス 座 長：井上 達 (国立医薬品食品衛生研究所)</p> <p>機能ゲノム科学—生命メカニズムの理解にむけて— 小原 雄治 (国立遺伝学研究所)</p> <p>汚染物質の魚類への影響評価におけるトキシコジェノミクスとその将来性 ティム ウィリアムズ (英国 バーミンガム大学)</p> <p>メダカゲノミクスの進展 成瀬 清 (東京大学大学院)</p> <p>アフリカツメガエル (<i>Xenopus laevis/Xenopus tropicalis</i>) を用いたマイクロアレイの現況 ブルース ブルンバーグ (米国 カリフォルニア大学)</p> <p>内分泌攪乱化学物質のトキシコジェノミクス評価 ティモシー リチャード ザカロフスキー (米国 ミシガン州立大学)</p> <p>ラットにおける非遺伝子傷害性肝発がん物質投与による発現遺伝子群のカタログ化 渋谷 淳 (国立医薬品食品衛生研究所)</p> <p>内分泌攪乱化学物質に対する胎仔の転写プロファイル ジョージ P. ダストン (米国 プロクターアンドギャンブル社)</p>

2001年12月17日 (月)

9:30	<p>セッション 4 野生生物への影響</p> <p>座長：井口 泰泉 (岡崎国立共同研究機構)</p> <p>内分泌攪乱と他の毒性機序との相互作用の重要性 マイケル H. デブレッジ (英国 プリマス大学)</p> <p>内分泌攪乱化学物質感受性遺伝子: 野生生物におけるアリル炭化水素受容体の分子生物学的解析とダイオキシン感受性 マーク E. ハーン (米国 マサチューセッツ州ウッズホール海洋研究所 (WHOI))</p> <p>内分泌攪乱化学物質が魚類の成熟・再生産に及ぼす影響 —農林水産省における取り組みを中心として— 藤井 一則 (独立行政法人水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所)</p> <p>アトラジンによるカエルの雌雄同体：室内研究と野外研究との連携 タイロン B. ヘイズ (米国 カリフォルニア大学バークレー校)</p> <p>エストロゲンを越えて—内分泌攪乱をもたらす複数の機序 ルイス J. ジレット Jr. (米国 フロリダ大学)</p>
12:00	昼 食
13:15	<p>セッション 5 健康影響</p> <p>座長：平原 史樹 (横浜市立大学) ポール A. L. ランカスター (オーストラリア ニューサウスウェールズ大学)</p> <p>日本の先天異常モニタリング —モニタリングによる内分泌攪乱化学物質の影響の評価— 平原 史樹 (横浜市立大学)</p> <p>オランダにおける停留精巣と尿道下裂：内分泌攪乱化学物質が関与しているか？ フランク H. ピエリク (オランダ エラスムス大学ロッテルダム)</p> <p>男性の生殖健康の傾向 ポール A. L. ランカスター (オーストラリア ニューサウスウェールズ大学)</p> <p>1,1-ジクロロ-2,2-ビス (P-クロロフェニル) エチレンとポリ塩化ビフェニルと乳癌: 米国における5つの研究の総合分析 デイビッド J. ハンター (米国 ハーバード大学)</p>
15:15	休 憩
15:30	<p>セッション 6 海外の取組の現状</p> <p>座長：武井 貞治 (環境省)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>基調講演： WHO/UNEP/ILO国際化学物質安全性計画 (IPCS) における内分泌攪乱化学物質 (EDC) に関する科学の現状についてのグローバルアセスメント ロバート J. カブロック (米国 環境保護庁 (EPA))</p> </div> <p>内分泌攪乱化学物質スクリーニングプログラムの実施に向けた進捗状況 ゲーリー E. ティム (米国 環境保護庁 (EPA))</p> <p>ホルモン様活性を有する化学物質 (HAA) に関する化学工業界のリサーチプログラム ジュディス A. グラハム (米国 米国化学工業協会)</p> <p>英国における内分泌攪乱に関する調査 キャスリーン キャメロン (英国 環境・食糧・農村地域省 (DEFRA))</p> <p>マレーシアにおける内分泌攪乱化学物質の調査 ムスタファ アリ モハマド (マレーシア マラヤ大学)</p>
18:00	<p>閉会挨拶</p> <p>環境省 環境保健部長 岩尾總一郎</p>